

虫の居所

三 春

その昔、中国の道教では「人の体には3匹の虫が棲んでいる」とされていたそうです。この虫は人の行動を絶えず監視していて、庚申の日*¹に人が眠ると体から抜け出して閻魔大王に悪行を報告し、寿命を縮めようとする信じられていたのです。

日本でも江戸時代に、人の体には9匹の虫が棲んでいて、人間にさまざまな感情や病気をもたらすと考えられていました。虫は、心、腹、胸などに棲みつき、人の感情や意識を操っているというのです。

「虫」という言葉にはいろいろな解釈があり得ますが、その多くは「癩癩」の意味でしょう。昔は回虫やサナダムシなどの寄生虫が本当に身体の中に居て実際に病気をもたらしたので、体内には虫が棲んでいると思われるようになったのも無理からぬことです。

そんなわけで、虫のつく言葉は実に沢山あります。例えば「虫の居所が悪い」（少しのことにもすぐ腹を立てるほど機嫌が悪い）、「腹の虫がおさまらない」（ひどく腹が立ってどうにも我慢できない）、「虫が好かない」（なんとなく嫌だ）、「虫がいい」（自分に好都合なようにしか考えない図々しい様子）、「虫唾*²が走る」（苦手なものや嫌いなものに対する不快感や嫌悪感）、「虫の知らせ」（何の根拠もないのに何か悪いことが起きそうな予感）など。そうそう、「浮気の虫」「お邪魔虫」「疝の虫」なんていうのも……そういえば落語には『疝気*³の虫』という、蕎麦好きの間抜けな虫が登場する噺もあります。

いずれにしても、どうしてもなののはっきりしないことを、人の体に棲みついている虫がやったことだという意味付けをしたかったのかもしれない。

自分で考えたり感じたりしたことのはずなのに思い通りにならない、それを昔の人は「虫」を持ち出すことで納得したかったのでしょうか。一方では、直接的に言いたくないことや都合の悪いことも、全部「虫」のせいにしてしまえ！ という思いもあつたに違いありません。

* * * * *

*¹ 庚申の日…干支の「庚^{かのえ}」と「申^{さる}」が重なる日で、60日に1度訪れる

*² 虫酸…胸がむかむかしたときに逆流してくる胃液を、虫が出した酸っぱい液体とし、この虫酸が口に出てくるほど不快な様子を「虫唾が走る」という。

*³ 疝気…疝気は泌尿器系の病気の総称。昔は「惱気^{りんき}は女の憤むところ疝気は男の苦しむところ」などとも言われた。